

武装する敬語

—非命題的アイロニー考察—

尾 鼻 靖 子

I はじめに

本稿では、敬語を使用したアイロニー現象を分析する。敬語は社会における対人関係（上下、親疎関係、あるいは公共の場）を示す指標（index）であるが、現実の敬語現象は、常に他者に敬意を払うという規範に沿ったものばかりではない。敬語の使い方によっては否定的感情を表すことも可能であり、アイロニーもそのうちのひとつである。しかしながら、アイロニー研究が最近多くの注目（特に英語に関して）を集めているにも関わらず、敬語のアイロニー分析は、Brown (2013) の韓国語における敬語、Okamoto (2002, 2007) の日本語の敬語を対象にした研究以外、まだまだ開発の余地がある研究分野である。

これまで、敬語のアイロニー研究では、普段敬語を使用しない相手（親しい友達、目下など）に故意に敬語を使うことは「話者の不誠実さ」（“a cue of pragmatic insincerity”）を示すのでアイロニーを生起する（Okamoto, 2002: 120）というのが主な議論で、河上 (2018) は、それを「偽善型アイロニー」とも名付けている。国語学者の間でも敬語を不必要に高いレベルに上げたり、普段使わない相手に使うと「慇懃無礼」となり「皮肉」を表すことがあると述べている（例：芳賀, 1973 [1976]；蒲谷, 2003 [2013]；菊地, 1994；大石, 1975）。しかし、Brown (2013) の韓国語の敬語分析を除いて、コンテキスト全体を眺めて発話を分析することでどのようなプロセスで敬語アイロニーが生じるのか、アイロニー生起の要素は何なのかについて論じたものはほとんどない。しかも、目下が目上に対して適切な敬語を使っても、アイロニーが敬語使用によって誘発される例に至っては皆無である。

本稿では、ドラマや映画における対話を例示し、どのように敬語アイロニーが生起するのか議論する。従来、アイロニーの定義は「話者の意図と発話の内容（意味）との間に食い違いがある」という命題（proposition）が前提となっているのだが、敬語が引き金となって起こるアイロニーの中には、この命題がなくともアイロニーが成立することがある。従来の定義が命題を前提とする理由は、英語などではコンテキストから推論される「話者の意図」と実際に現れた「発話」という2者の間に何らかの不整合、異種の価値が見出されることでしかアイロニーに結びつかないからで、この両者間の不整合という命題

がなければアイロニーも生じないということになる。しかし、日本語の場合、話者の意図と発話が一致していても、敬語が不適切であったり（例：不必要なレベルの敬語）、発話に含まれているストラテジーが敬語世界に合い入れなかったり（例：目上に対して不適切な言葉を使う）した場合、アイロニーが生起する。これを本稿では「非命題的アイロニー」（non-propositional irony）と名付ける。つまり、敬語アイロニーの例の中には、従来のアイロニー定義に当てはまらないものがあり、将来定義を再考慮する必要があるのではないかと筆者は考える。

本稿では「皮肉」という用語の代わりに「アイロニー」を使用するが、それは「皮肉」は sarcasm と irony の両方を示すので、より適格なアイロニーの特性を捉えるために区別したいからである。本稿では、Dyrel (2018: 150-151) の定義に従って、irony は否定的な評価を基にしており、sarcasm は irony の下位区分として設け、それを sarcastic irony と名付け、non-sarcastic irony と区別する。この区別は相手を攻撃しているかどうかで決定される。例えば、non-sarcastic irony には揶揄（否定的評価）しても相手に対して攻撃や批判をしていないジョークなどが含まれる。本稿では、例（7）がこれにあたる。

以上を踏まえて、本稿は次のように議論を進める。次節では、これまでアイロニーがどのように扱われてきたのか、アイロニーはどのように生起するのかについて、基本的な考察を行い、さらにアイロニーはコンテキスト依存の現象であり、コンテキストにアイロニー生起を引き起こす要因がある、という点に焦点をあてる。この節では命題的アイロニーを表す日本語の例を提示し、アイロニー生起要因を分析する。第3節では、非命題的アイロニーの例を分析する。その例として2種類挙げる。ひとつは、敬語の世界において不適切な言葉、あるいは不必要な（例えば必要以上のことを敢えて述べる）発話が、敬語が持つ規範的意義と不整合を起こしアイロニー生起に繋がる場合、もうひとつは、相手が発した敬語表現を繰り返すことで、（元の尊敬語が）自敬語となったり（謙譲語が）相手を低める言葉となることで、アイロニーが生じる場合である。第4節では、アイロニー現象における敬語の機能について考察する。「敬意」を表すと一般に言われている敬語が、アイロニー現象では、その「敬意」を隠れ蓑に、目下が目上に対し応酬する際の鎧の役目を担う。アイロニー（特に sarcastic irony）は「間接的な攻撃」とよく言われるが、敬語がこの場合間接的な攻撃の手段として用いられるのである。第5節ではアイロニー定義の再考察を提示する。

II アイロニーの定義、生起誘因要素、コンテキストの役割

Burgers (2011: 190) は、アイロニーを “indirect speech act with a reversal of evaluation”, あるいは “an utterance with a literal evaluation that is implicitly contrary to its intended evaluation” と定義している。また、Kapogianni (2014: 601) は、“meaning replacement” と

というのがアイロニーに含蓄されると述べている。同じように Attardo (2000: 797) は、“saying something while meaning something else” と定義している。このような現象を Rosique (2013: 32) は、“a transgression of quality” という言葉で表現している。つまり、これらの定義に共通しているのは、アイロニー生起の要因には話者の発話の文字通りの意味と話者の意図との間に食い違いがあるという点である。この場合、発話の内容と事実とが一致していても一致していなくてもアイロニー生起には関係はない。例えば、よく約束を破る友人に対して「君は信頼できる友達だ」という場合、事実と反対のことを言うことでアイロニーを表している。一方、大食いの人に向かって「よく食べるねえ」と言う発話は事実と一致しているが、話者の意図は大食いを批判的に評価している。あるいは、「あまり食べるなよ」という意図があると解釈することも可能である。いずれにせよ発話の意味と話者の意図とに食い違いがあるので *sarcastic irony* となり、発話の内容が事実かどうかという点は必ずしもアイロニーの要因とならない。これは、Kumon-Nakamura et. al. (1995) が指摘した点である。

アイロニーの意味はコンテキストから推論的に導き出されるので、アイロニーは語用論的現象であると周知されている (Attardo, 2000: 813)。また、アイロニーにおける意図する意味 (話者が本当に伝えたかったこと) には、「共通の前提」 (*shared presuppositions*) があるという (*ibid.*: 814)。即ち、H (聞き手) は、S (話し手) が文字通りの意味 (M) を伝えていないことを知っており、同様に S も H がそのように把握していることを知っている。S は、H が文字通りに受け取らず、他の解釈をするであろうと期待している、という前提があるというのである。この Attardo の説に付け加えると、アイロニーは相手に伝わらなければ意味がない、だから対話者がどのような状況に置かれているのか、そして会話がどのように進んできたのかというコンテキスト無しでは、この「共通の前提」も成立しないということになる。Bousfield (2008: 121) が特に *sarcasm* の場合具体的なコンテキストがあってはじめてその効果が表れると述べているが、これはアイロニー全般に言えることで、アイロニーの誘因となる要素はコンテキストに潜在しているのである。このようなコンテキストを Utsumi (2000: 1778) は “*ironic environment*” (アイロニー環境) と名付け、アイロニー生起には欠くことのできない先行条件であると主張している。

Utsumi はアイロニー環境を構築する要素として「話者の期待、期待外れ、その結果持つ否定的感情」を挙げているが、期待や期待はずれがなく相手に否定的感情しかない場合にもアイロニーの形で非難することは可能である。例えば、

(1) 半沢：分かりました…5億を取り戻せばいいんですね。

浅野：ぜひそうしてくれたまえ、期待しているよ、半沢融資課長。

半沢：もし取り戻すことができたなら、その時は今回の件、土下座して詫びてもらいます…よろしいですね。

浅野：ハハッ、そんなことができるものならな。ぶざまだな、半沢。

(『半沢直樹』第1話)

このドラマでは、主人公半沢直樹の銀行が東田という人物の会社に5億円を融資したのであるが、実は東田は浅野支店長の友達であり、計画的に自己破産し5億円を海外に隠匿し、その見返りとして5千万円を浅野に渡したというのが背景となっている。半沢は融資実行を急がせた浅野に対して疑惑の念を持ち捜査するが、証拠はまだ挙がっていない。浅野は5億損失を融資課長である半沢のせいにし、事あるごとに半沢をいじめる。例（1）はそのひとつである。

浅野の「期待しているよ、半沢融資課長」という言葉は、それまでの浅野と半沢との関係の経緯を鑑みれば、文字通りの意味でないことが分かる。また、最後の行の「ハハッ、…半沢」と相反するものであり、後者のほうが浅野の本音である。5億など取り戻せるはずはない、と浅野は思っているが「期待しているよ」という意向と反対のことを発話しているのでこれは propositional irony である。しかし、この言葉に至るまでに浅野の半沢への何等かの期待がまずあってそれが期待外れになったという過程は見当たらない。浅野が半沢を貶めるためにひたすら否定的感情を表現しているだけで、それをアイロニーという形で相手に投げかけているからである。つまり、「期待と期待外れ」というのはアイロニー環境を構築するのに必ずしも必要条件ではないことが分かる。

例（1）にはもうひとつのアイロニーが存する。「半沢融資課長」とわざわざ半沢の名前に職場でのポストと職位を付ける呼称がアイロニーを誘因する。このドラマでは、銀行の上司は対面している部下を名前だけ（「半沢」）で呼称するのが普通である（一般的にもそうであろう）。しかし、浅野のアイロニー発話に続いて、半沢の職名と職位をわざわざ付加するところに、「融資課の課長であるお前の責任」というニュアンスが醸し出される。それが「期待しているよ」というアイロニーに続いて、半沢の立場をリマインドしているという点で半沢を揶揄している。二重のアイロニー（sarcastic irony）である。

アイロニーを誘因する要素はコンテキストに潜在していると前述した。この要素を仮に「アイロニー・キュー」（irony cues）と名付けよう。アイロニー・キューには上記で挙げた問題の発話に至るまでの対話の流れ以外に、対話者同士の人間関係（上下関係、友好関係など）、各人の取るスタンス、共通の経験、さらに常識や通説なども入る。また、ジェスチャーや顔の表情なども考慮に入る。目上が目下にわざと敬語を使用する場合も、その敬語がアイロニー・キューとなる。ここでアイロニー・キューの例をいくつか挙げてみよう。

（2）伊丹：今、取調室でおくつろぎいただいています。

杉下：そうですね。

（『相棒』 Season 12, #19）

このシーンは、逮捕された重要参考人が、人質を取ってアパートに立てこもっている兄について何も白状しない状態が続いた後、伊丹が溜息とともに取調室を出たところである。そこへ杉下が訪れる。参考人はどうしたのかという杉下の問いに対して、伊丹は例（2）

の一行目にあるような発言をする。

まず、警察に捉われて取調室にほとんど監禁されている状態は、常識で考えて「くつろぐ」と表現しない。かなり緊張を強いられ不安な感情も湧く。しかし、伊丹にとっては参考人の口述がなければその兄の立てこもりの状態が掴めない。だから、だんまりを決めている状態を皮肉ってこのように表現していることが分かる。つまり、取調室に対する「世間の常識」がアイロニー・キューとして機能し *sarcastic irony* を生み出している。さらに、犯罪に関わっている人間には普通敬語を使用しないし、事実、前のシーンで参考人に対しては敬語を一切使わず、命令口調で「吐け！」と怒鳴っていることから、また例(2)では、参考人がその場にはいないことから、例(2)の敬語はその参考人に対して敬意を表しているのではなく、アイロニーの強調として使われていることが分かる。この例も例(1)と同じく、話者の発話内容と意図とに食い違いがあることからアイロニー生起に繋がるので、*propositional irony* のカテゴリーに分類される。この場合の敬語は、アイロニーの度合いを増加するという役割を果たしている。

アイロニー・キューには他に「過去の共通経験」も含まれる。過去の経験がリマインドとして機能するのである。Kruezer & Glucksberg (1989) が “echoic reminder” という用語でアイロニー理論を構築しているが、彼らの reminder は本稿の「アイロニー・キュー」全てにあたる。本稿では、リマインドとは過去の共通経験に限って議論を進める。

(3) おやおや、釣り名人のお出ましだぞ。

(『美味しんぼ』7巻、第6話)

はじめて釣りを経験しようと山岡達が列車に乗り込む。そこに釣りの話や釣り道具の自慢話をしている他の若者グループがいたが、一緒に話をするうちにこのグループが山岡たちを素人と見、鯛を釣るんだという意気込みを軽蔑的にけなす。さらに到着先でも料理屋でばったり出会う。その時に山岡達を指して(3)の発話を向ける。

まず「釣り名人」は、鯛を釣ると意気込んだ山岡達の釣りの素人ぶりを皮肉って表現している。そして親疎関係を考慮すれば「お出まし」と敬語を使用するのは一見適切なようであるが、これは山岡達に直接言ったのではなく、グループのメンバーに向かって(しかし、山岡達に充分聞こえる程度の音量で)発話しているのである。また、列車の中でかなり侮蔑的な言葉を発した若者グループが、敬意を表して敬語を使うことはあり得ない。つまり、(3)の発話は、列車での共通経験がアイロニー・キューとして働くことで、「釣り名人」と言いつつ「素人への軽蔑」を暗示し、「お出まし」と敬意表意がその軽蔑を強調している。敬語がなくとも「釣り名人」のみで *sarcastic irony* を演出しているため、この例も *propositional irony* であり、敬語はそのアイロニーを明確にする機能を果たしている。

以上、アイロニー・キューの例をいくつか挙げたが、*propositional irony* 生起に敬語が使われている場合、敬語はそのアイロニーを強調する役割を受け持つことも判明した。敬

語がなくともアイロニーは生起しているの、そこに敬語を使うことでそのアイロニーを誇大化するのである。一方、次節で考察する non-propositional irony の場合は、敬語がアイロニーの引き金役を受け持つ。敬語の世界に相容れない（しかし、非敬語世界では受容される、あるいは敬語世界でも親しい間柄なら認容される）ストラテジーが敬語の持つ規範的意義と不整合を起こすため、アイロニー生起に繋がるからである。

Ⅲ 敬語が引き起こす非命題的アイロニー

この節では、非命題的アイロニー (non-propositional irony) の例を考察する。従来敬語の皮肉は、普段敬語を使わない相手に敬語を使用した場合に起こる例が挙げられてきたが、これも non-propositional irony として分類される。例えば、

(4) <捜査二課の上司が部下に>

ひまつぶしに特命の部屋に行ってはコーヒーを召し上がっていらっしゃる、それはどういうことだ！

(『相棒』 Season 7, #10)

杉下は特命係という何の捜査部署にも属さない窓際のような部署に所属しているが、このドラマシリーズでは杉下が様々な事件を解決する。ある経済事件が起きたときに、捜査二課の刑事たちが杉下を頼って特命係の部屋を訪れることが多くなった。その時にコーヒーの提供もあってコーヒーを飲みながら、事件のことについて相談していたことが上司の耳に入ったのであるが、それが上司としては気に食わなかったのであろう。例(4)は、部下を叱って発した言葉である。「コーヒーを飲んでいる」と敬語がない発話であれば、部下を叱責しているだけになるが、部下に向かって敬語を使うことで、sarcastic irony が生じる。

この例では敬語使用の不適切さ（目上が目下に敬語を使用する）以外には、話者の意図は発話の内容と一致しているのでアイロニーを生起する命題に当たる要素が見当たらない。つまり、目下への敬語がアイロニー・キューとして機能し、非命題的アイロニーを提示しているのである。

一方、非命題的アイロニーの中には、敬語の使用が適切であっても生じることがある。このタイプのアイロニーには、話者の意図と発話の内容は一致しているが、目下が目上に対して微妙な方法で不適切なアプローチを行うことで、適切な敬語を使いながらも目下が目上に応酬する手段として使うアイロニーがある。この場合、敬語の持つ規範的意義と敬語世界におけるアプローチ (honorific strategies 「敬語ストラテジー」: Obana, 2019) の間に不整合が起こるためアイロニーが生じるのである。

また、相手の敬語発話を繰り返すことで、元の尊敬語が自敬語になったり、謙譲語が相手を見下げる軽視語になったりするという「敬語の反転」あるいは「敬語の U ターン」

現象によってアイロニーが誘発されるという non-propositional irony の例もある。この場合、発話、話者の意図、及び敬語世界のストラテジーのどの間にも不整合要素は見当たらない。相手の言葉を繰り返した結果生じる敬語の U ターン現象そのものがアイロニーを生起するのである。相手の言葉を繰り返して、それを相手に向けて発した場合、このおうむ返しは相手に対して失礼な応答となり、アイロニー・キューとして機能する。しかし、どのような質のアイロニーであるかは、対話者同士の人間関係に拠る。だから友好的な関係を保っている対話者同士ではユーモアとなる例もあるが、敵対関係にある場合は相手への攻撃手段として敬語の U ターンを利用し、相手を格下げする効果もある。以上に述べた非命題的アイロニー二種を次の副節で考察する。

1. 敬語アイロニー：目下が目上に応酬する手段

上下関係が明確にされている企業や警察などの組織では、目上の言うことに目下が直接反撃することはよほどのことがない限り起こらない。それでは目下は常に従順で黙って何でも従うのかというとそうではなく、なんらかの形で応酬する場合もあるようである。アイロニーを用いて間接的に相手に応酬するののひとつの手段であろう。その例を二つ挙げてみたい。

(5) 杉下：まさか君がこの村にいるとは思いませんでした。

神戸：今日中にお目にかかれてよかったです。

杉下：何か急用でも？

神戸：はい？

杉下：僕に何か急用ですか。

神戸：配属初日ですから、きちんとご挨拶したくて。

(『相棒』 Season 7, #19)

このエピソードは、神戸が杉下のいる特命係に配属になった初日に起こった事件を扱っている。神戸は警視庁に出勤するが、すでに杉下は事件を追いかけてある村に出向いている。神戸は後を追っかけて杉下の泊まっている旅館に辿り着く。例(5)はその時のシーンである。神戸の「今日中にお目にかかれてよかったです」という発話は、少々奇妙な感じを受けるものの否定的意味は明確には見出されない。しかし、このシーンにいたるまで、神戸の初日は歓迎も挨拶もなく、上司である杉下からは何の連絡もなく不在という、神戸にとってはあまり好ましくない、むしろ冷遇されると感じる状態で初日が始まっている。その後もなんとか電話で連絡しても杉下はそっけない。このような背景がアイロニー・キューとなって、上記の神戸の発話が *sarcastic irony* として判断されるのである。

まず初日の対面挨拶代りに「今日中に会えてよかったです」という発話は目上への挨拶としては少々奇妙である。一日中追っかけてやっと夕方に上司に会えた点を匂わせていると判断し得る。しかも、杉下のあまりにそっけない上司としての態度は神戸にとって不愉快で

あろう。それがこのような奇妙な発言となって、神戸の不満気を匂わせていると解釈できる。しかし、この段階ではアイロニーではなく単なる不満気を表現しただけになる。一方、敬語は目上への敬意として適切に使用されているのだが、これが奇妙な挨拶（腹に一物がありそうな発言）と不整合を起こす。その不整合がアイロニー生起に繋がる。その時の神戸の表情は、溜息を交えながらわざと笑顔を作っているように見えるが、アイロニーをさらに際立たせている。

アイロニーは相手に通じないとその目的は果たせないが、通じてもこのような微妙な方法で応酬する目下に向かって、目上はやり返すことはなかなかできない。アイロニーは相手がまともに応酬できないという効果があるからアイロニーなのである。しかも敬語でもって目下としての弁えを果たしているので、目下の応酬を目立たせない役割を担っている。つまり、目下の観点から言えば、敬語という隠れ蓑を使って目上に対して一矢を報いることが可能となり、目上の観点から言えば、敬語で巧妙に迷彩された微妙な応酬に目くじらを立てるのはなかなかできないことになる。

次の例では、目下としては不必要（余剰的）な言葉を発して目上に間接的に応酬する例である。例（5）は、神戸が杉下の部署に所属が決まった初日のエピソードの一部であるが、その後も両者はあまり良好な関係を築き上げられずにいくつかの事件にあたっていく。次の例もそのひとつである。

（6）杉下：まだ頼みたいことがあります……（依頼内容に続く）

神戸：分かりました。今度はご期待に沿えるようにがんばります！

（『相棒』Season 8, #17）

この対話が起る前に、杉下が神戸を伴わずに単独で行動する。刑事は普通二人で行動するのが普通であるが、このエピソードでも杉下は神戸をうとましく思うのか、一人で出かけてしまう。警視庁に残った神戸は、杉下から電話依頼を幾度か受け、その度に局のファイル調べて情報を杉下に伝える。しかし、杉下は「もっと丁寧に調べるべきだ」とか「足りない」とか文句ばかりで神戸を労うことがない。例（6）の対話の直前でも神戸の伝えた情報に欠けている細かい点を指摘し、神戸は独り言のように「重箱の隅つつきやがって」と悪態をつく。この時点ですでに神戸は杉下に対して否定的な感情を持っている。

例（6）の下線部の発話は、目下が目上の依頼に対して応える戦略یとしては不必要である。特に警察のように上下関係が厳しい環境では、「承知しました」という応答だけで充分で、「ご期待に沿えるようにがんばります」は余計な発言であろう。神戸の意図もこの言葉通りであろうが、神戸の不満感情がこの不必要な発言となって現れていると解釈できる。敬語自体は、目下が目上に使う言葉としては適切であるが、敬語世界で不必要と判断されるこの（下線部の）発言とはバランスの取れた様相を呈していない。この不整合性が *sarcastic irony* を生起させる結果となる。この例でも目下が目上に敬語を隠れ

衰にして、アイロニーを利用して間接的に応酬する（抵抗する）様子が見られる。

2. Uターン敬語がもたらすアイロニー

これまでアイロニー生起の要因は、命題的アイロニーであっても非命題的アイロニーであっても、問題の発話とその周辺との間に不整合性が見出されるころにあった。命題的アイロニーの場合は話者の意図と発話の内容との間に、非命題的アイロニーの場合は、敬語世界のストラテジーと敬語の持つ規範的意義との間に不整合が見出されるため、アイロニーを生み出すのだと観察してきた。この副節では、発話とその周辺との間には不整合性は見出されず、敬語の使い方が逸脱しているため起こるアイロニー¹⁾について考察する。前述したように、目上が目下にわざと敬語を使うのも敬語の使い方の逸脱性を示しているが、この副節では、相手の敬語を繰り返すことでアイロニーが生起する例を扱う。人間関係が良好でない場合、相手の発話を繰り返す行為²⁾は失礼にあたる。これがアイロニー・キューとして機能する。同時に、敬語をそのまま繰り返すと、尊敬語の場合は自敬表現に変化し、元が謙譲語の場合は相手を貶める卑下表現に転換する。この敬語の反転という曲解的な利用が相手の言葉を繰り返すという失礼な行為と絡まってアイロニーを生起するのである。

(7) 部下：倉石さん、来ていらしたんですか。

倉石：来ていらしてましたよ。現場百回っていうだろ。

（『臨場』第8話）

これは、倉石の部下が倉石を探し回って、ようやく殺人のあった現場に倉石がいるのを見つけて発した言葉に対して、倉石が自敬語を使って応えるシーンである。ドラマでは部下が倉石をそのような場所で見つけたので意外だという表情と声の調子が見られる。倉石は検視官として、すでに死体の検視を終えている。だからそれ以上のことで殺人現場にいるのは意外な印象を与える（しかし、このドラマシリーズでは、倉石が次々と事件を解決していく）。

倉石の自敬語は、部下の言葉をそのまま繰り返した結果起こった現象である。繰り返すことで相手を揶揄している。倉石は部下の質問が「意外」で、「事件が行き詰まったら、現場に何度も足を運ぶのは当たり前」という刑事事件の基本を教え諭しているのである。倉石の表情は口を少し尖らせ、目を見開き、意外だという印象を与える。しかし、倉石は刑事ではなく、検視官である。だから倉石が殺人現場に足を運ぶのは、やはり意外な行動なので、部下の質問は当然である。そうすると、倉石が「現場百回」と刑事のような言葉を発するのは少々ふざけているとも解釈できる。倉石とその部下の関係は普段から良好

1) しかしながら、広い意味では、敬語の逸脱の使用は、人間関係やコンテキストの状況との間に不整合性が見られるともいえる。

2) 相手の言葉を繰り返す理由として、確認や驚きを示す場合もあるが、この副節では、相手の敬語までもそのまま繰り返す場合を考察している。

で、厳しいが部下の面倒をよく見ている。だから、倉石の自敬語は、ユーモアを含んだアイロニーと判断でき、non-sarcastic irony のカテゴリーに入れるのが適切であろう。

次の例は元の発話が謙讓語で適切に使用されたのであるが、それをそのまま繰り返すことで相手の行動が謙讓体に向向されるので、相手を見下すような結果となる例である。

(8) <伊丹が取調室の横にある鏡で仕切られた部屋に杉下とその部下神戸がいるのを見つける>

伊丹：ここで何をしてんですか、特命さん！

杉下：ここで静かに見学させていただいています。

伊丹：そんなこと言って、また乱入するでしょ。もおっ！こっちへ来てください。<伊丹は杉下と神戸を取調室に連れていく>

伊丹：えー、二人の見習いが同席しますが、ご了承ください。

<二人に向かって>静かに見学させていただいでくださいよ！

(『相棒』Season 7, #18)

このシーンでは、特命係の杉下と神戸が隣の鏡張りのある部屋から取調室の様子を見ているのを刑事の伊丹が見咎め、しかしながら杉下たちを取調室に連れていく。これは、杉下が常に事件を解決するのを知っている伊丹は悔しい思いをしながらも杉下を利用しようとするからである。伊丹の最後の言葉（棒下線部）は、杉下の謙讓語（波下線部）をそのまま繰り返したため、杉下たちを卑下する結果を招く。例（7）と異なる点は、伊丹は杉下を常に敵対視しているため、このUターン敬語は、かなり否定的感情を表し、相手を格下げする効果を生み出している。その理由は、このシーンだけでも伊丹の杉下に対する感情が露わな言葉となって表現されているからである。「特命さん」と窓際的存在のポストをわざわざリマインドし、杉下が事件を詮索する動作を「乱入」と否定的な言葉で表現し、また取調室に同席している人たちに杉下たちを「見習い」と格下げする表現で紹介している。これらがアイロニー・キューとして機能し、Uターン敬語がどのようなアイロニーであるかを決定する。しかも、このUターン敬語を発することで「静かに見学しろ」と釘をさすことも忘れていない。痛烈な sarcastic irony の例である。

IV 武装する敬語

敬語は社会的規範として機能する場合ポライトネスを表す。しかし、敬語は Brown & Levinson (1978, 1987) の唱えたポライトネスとは次の点で異なる。後者は相手との対話中に目論む交渉、調節、匙加減としての方略であって、対話の目的（ゴール）を達成するための手段である。一方、敬語は対話の内容交渉には関与せず、相手との社会的関係を言語で示す指標（index）に過ぎない（「指標に過ぎない」敬語が非常に複雑な構成を持ち、その語句も数えきれないほど存在するのであるが）(Obana, 2017: 286-287)。だから、

敬語を含む発話は二重構造のポライトネスを呈する。即ち、話者が決定したストラテジーに基づいて作成した発話（デフォルト）と、それを敬語体に変換したもの（honorific markings [Obana, 2017]）という二重構造である。

Brown (2011; 79) は、韓国語の敬語を“iconic”と呼んでいるが、敬語が社会的意義を呈する指標であるために、韓国人は敬語が社会的関係を明確に示しているかどうかという点に注目し、また重要視する、と述べ、敬語の持つ社会的意義は普遍的に浸透しており、敬語を使う相手に使わない場合には社会的制裁（社会学でいう social sanction）を受けることもあり得る、と述べている。日本語の敬語も同じような心理的、社会的効果を持つ。敬語は、それほどイデオロギー的インパクトを持つのである。Coulmas (1992) が日本社会における敬語の重要度を示す例として、旅客機が墜落する寸前まで、キャビンアテンダントがパイロットに敬語を使い続けた記録を紹介しているが、これは敬語使用に対する社会的注目度、敬語の影響力がいかに大きいかを証している。

しかし、一方で上記の敬語のイデオロギー的意義を逆手に取ると、目下が目上に間接的に応酬したり一矢を報いたりすることが可能となる。敬語アイロニーはその現象のひとつであり、前述の例（5）と（6）がそれを示す。この場合、目下が適切な敬語を使用しているため、敬語が隠れ蓑となり、目上への多少の無礼さが見逃されることが多い。あるいは気づいても目上はその無礼さに目くじらを立てていないのは、目下の使用する敬語に注目する度合いが高いからではないかと思われる。また、例（4）で見たように、目上が目下に（あるいは敬語を使う必要のない相手に）敬語を使ってアイロニーを発する場合でも、直接具体的な批判の言葉を発する場合よりも多くのニュアンスを伝えることができるであろうし、しかも直接の誹謗や卑俗的な言葉で攻撃するよりも間接的に批判を投げかけることができるので、後々の問題（部下の反撃、パワハラ問題など）を避けることもできる。例（7）及び（8）に見られる敬語のUターン現象は、確かに話者を格上げしたり相手を格下げしたりするので相手に対して失礼であるが、これも、敬語の使用実情を言い訳にすることができる。つまり、敬語の使い方が誤っている現象（特に尊敬体と謙讓体を混同する誤り）を我々は日常的に経験しているわけであるから、誤用が許されるのではないかという逃げ道を作ることも可能である。敬語は義務教育で学ぶが、実際に身に着けるのは社会人になってからで、我々は日常的に敬語の誤用を繰り返しているのが実情であるからである。Wetzel (2004: 14) が日本語話者にアンケート調査を行って、たとえ敬語法を誤っていても、敬語を使用するという努力が評価され、好ましいという判断を下されることが多い、と結論している。すると例（7）や（8）は、そのような社会的心情を逆に利用しているとも言える。

以上に述べたように、敬語は目下が目上に対して（表面的であっても）敬意を表す言語現象として規範的に理解されているわけであるが、それを隠れ蓑として利用することで目下が目上に応酬する手段に転用したり、自分に反撃が及ばないように防御的作為をしたり

することができるのである。では、敬語を受ける側としてはどうであろう。上述のドラマや映画に現れる敬語アイロニーの例を見る限り、目下の応酬に対して目上がそれを咎めたり、非難することはなかった。その理由として、アイロニーが批判を間接的に仕上げているから相手の応戦が起こりにくいという点も考慮に入れるべきであるが、筆者はそれよりも目下の使う敬語のほうに目上の注意が第一に向くという社会的心理（あるいはイデオロギー的信条）のほうが効果を発揮しているからだと考える。浅田（2014: 8-9）が、ある出版会社の担当が執筆者にひたすら低頭して敬語を使い、結局執筆者に執筆させることに成功した例を挙げて、「敬語を駆使して目上の相手を持ち上げながら、巧みに自分の思い通りに動かす。というより、相手を自分の思い通りに動かすためにこそ、敬語を使っている」（浅田, 2014: 9）という考察を述べている。だから、敬語の持つイデオロギー的影響力は使う側にも受ける側にも浸透しており、特に敬語を受ける側は、相手が敬語を使うかどうかは自分の社会的アイデンティティの問題に関わっているため敏感にならざるを得ないであろう。従って、本稿で考察した敬語アイロニーは、まさに敬語のもたらす社会的心理を逆に利用する例と言えるであろう。敬語が相手への批判的行為をカムフラージュする役割を担い、しかも相手からの反撃に対しても自己を防御する盾の代わりとなる。まさに敬語が武装することで成り立つアイロニーであると言える。

V アイロニー定義再考

以上、本稿では非命題的アイロニーの例を分析してきた。従来のアイロニー研究における定義ではアイロニー生起の条件として「話者の意図と発話の内容との間に不整合性が見受けられる」という命題が中心であるが（命題的アイロニー）、日本語の敬語アイロニーでは、話者の意図と発話内容が一致していてもアイロニーが生起することがあると主張した（非命題的アイロニー）。つまり、敬語アイロニーの中には従来のアイロニーの定義が適用できない例があると示した。

従来の定義は、真偽を証する命題が定義の主要軸となっている。つまり、現象として現れたもの（発話の文字通りの意味）と話者の意図との間に真と偽があるため、即ち両者がそれぞれ提示する評価に不整合があるため、アイロニーを生起するというのが基盤となっている。しかし、日本語の場合、敬語が発話に介入することで、発話と話者の意図との間に整合性があっても、敬語が主軸となってアイロニーを生み出すことが可能である。しかし、このような非命題的アイロニーにおいても、発話とその周辺に何らかの規範から逸脱した要素が見出されなければアイロニーは成立しない。例えば、敬語の持つ規範的意義が目下のアプローチの不適切さと不整合を起こす、あるいは、敬語の不適切な使い方をする（目下に敬語を使う、あるいはUターン敬語を起こす）といった例を考察してきたが、発話内あるいは発話と発話周辺間に規範から逸脱した、あるいは発話が起こった状況と矛盾

を起こしている要素が存在してはじめてアイロニーが生起するのである。

そうすると、従来の定義に示唆されている「不整合性」を発話と話者の意図との間だけに限定せずに、問題の発話と発話を取り巻く周辺との間に見出される不整合性にまで拡張することで、アイロニーの定義は命題的及び非命題的アイロニーの両方を包括することができる。さらに、アイロニーを生起するキューは、「命題の真偽」ではなく、発話内あるいは発話周辺から抽出される「逸脱性」であるということになる。

アイロニーの定義を再考するには、さらにアイロニーの例を分析する必要がある、アイロニー誘因のキューに関しても調査し分類するべきである。しかし、本稿においては次のようにアイロニーの定義の方向付けを提案してみたい。

アイロニーの定義（仮説）：アイロニーとは、発話内に起こる規範から逸脱した現象が契機となって起こる、あるいは発話と発話周辺（人間関係、発話の起こった状況、対話者間の友好関係、話者の意図などを含むコンテキスト・キュー）との間に見出される不整合性が契機となって起こる、間接的な否定的言い回しのことである。

VI 終わりに

本稿では、敬語が現れる発話のアイロニーについて議論を進めてきた。発話の内容と発話者の意図が異なる命題的アイロニーでは、敬語はそのアイロニーを強調する機能を持つ。一方、発話の内容と発話者の意図が一致していても、敬語とその周辺との間に、あるいは敬語の使用法そのものに、敬語世界の規範からの逸脱性、矛盾が見出される場合、アイロニーを生起することもある。それを非命題的アイロニーと名付け、従来のアイロニーが適用されない例があることを示してきた。

本稿では、非命題的アイロニーの例として次の二種類を取り上げた。一つ目は、目下が適切な敬語を使っても不必要な発言をしたり、目上に対して適切と言えない言葉を発話の中に組み入れることで、それが敬語の持つ規範的意義から逸脱しているため起こるアイロニーの例。二つ目は相手の使用した敬語を繰り返すことで元の謙譲語が相手を格下げする相手謙譲となる、あるいは元の尊敬語が話者自身を格上げする自敬語となる、敬語のUターン現象。いずれの場合も発話と発話者の意図との間には食い違いはなく、アイロニーは命題の真偽によって生起するものではないと考えられる。

敬語アイロニーは、敬語が持つイデオロギー的所信を逆手に利用して成り立つ。敬語は言語的意味はなく、社会の人間関係を言語で証する指標として存在しているため社会的意義が主要な機能を持つ。だから、例えば上下関係では敬語を使うものだという所信（規範的信条）は社会に浸透しているので、目上は、目下の敬語使用に注目し、また敬語使用によって目下が目上をどのように社会的関係を捉えているのかが明らかになるため、敬語の

使用に敏感となる。そこで、敬語アイロニーは、この敬語へのイデオロギー的所信を利用して、目下が目上に微妙な形で応酬する現象を提示している。この場合、敬語はまさに言葉の武装という役割を担っていると言えよう。

参考文献

- 浅田秀子 (2014). 「敬語の原理及び発展の研究」. 東京堂出版.
- Attardo, Salvatore (2000). Irony markers and functions: Towards a goal-oriented theory of irony and its processing. *Rask*, 12, 3-20.
- Bousfield, Derek (2008). *Impoliteness in Interaction*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Brown, Lucien (2011). *Korean Honorifics and Politeness in Second Language Learning*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Brown, Lucien (2013). “Mind your own esteemed business”: Sarcastic honorific use and impoliteness in Korean TV dramas. *Journal of Polite Research*, 8 (2), 159-186.
- Brown, Penelope, & Levinson, Steven (1978). Politeness: Some universals in language usage. In E. N. Goody (Ed.), *Questions and Politeness: Strategies in Social Interaction* (pp. 56 - 289). Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, Penelope, & Levinson, Steven (1987). *Politeness-Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Burgers, Christian (2011). Finding irony: An introduction of the verbal irony procedure (VIP). *Metaphor and Symbol*, 26, 186-205.
- Coulmas, Florian (1992). Linguistic etiquette in Japanese society. In R. J. Watts, S. Ide & K. Ehlich (Eds.), *Politeness in Language: Studies in its History, Theory and Practice* (pp. 299-323). Berlin/New York: Mouton De Gruyter.
- Dynel, Marta (2018). *Irony, Deception and Humour: Seeking the Truth about Overt and Covert Untruthfulness*. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton.
- 芳賀綏 (1973 [1976]). 『敬語・態度・行為』. 林四郎・南不二男 (編)「敬語講座7：行動の中の敬語」(pp. 67-104). 明治書院 (再版).
- 蒲谷宏 (2003 [2013]). 『表現行為から見た敬語』. 菊地康人 (編)「朝倉日本語講座8：敬語」(pp. 53-72). 朝倉書店 (第5版).
- Kapogianni, Eleni (2014). Differences in use and function of verbal irony between real and fictional discourse: (mis) interpretation and irony blindness. *Humor*, 27 (4), 597-618.
- 河上誓作 (2018). 「アイロニーの言語学」. 鳳書房.
- 菊地康人 (1994). 「敬語」. 角川書店.
- Kumon-Nakamura, Sachi, Glucksberg, Sam, & Brown, Mary (1995). How about another piece of pie: The allusional pretense theory of discourse irony. *Journal of Experimental Psychology, General*, 124 (1), 3-21.
- Kreuz, Roger J., & Glucksberg, Sam (1989). How to be sarcastic: The echoic reminder theory of verbal irony. *Journal of Experimental Psychology, General*, 118, 374-386.
- Obana, Yasuko (2017). Japanese honorifics re-re-visited. *Journal of Politeness Research*, 13 (2), 4-31.

- Obana, Yasuko (2019). Politeness. In P. Heinrich & Y. Ohara (Eds.), *Routledge Handbook of Japanese Sociolinguistics* (pp. 248-263). Oxon/New York: Routledge.
- 大石初太郎 (1975). 「敬語」. 筑摩書房.
- Okamoto, Shinichiro (2002). Politeness and the perception of irony: Honorifics in Japanese. *Metaphor and Symbol*, 17 (2), 119-139.
- Okamoto, Shinichiro (2007). An analysis of the usage of Japanese *hiniku*: Based on the communicative insincerity theory of irony. *Journal of Pragmatics*, 39, 1143-1169.
- Rosique, Susana, R. (2013). The power of inversion: Irony, from utterance to discourse. In L. R. Gurillo & M. B. A. Ortega (Eds.), *Irony and Humor: From Pragmatics to Discourse* (pp. 17 - 38). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Utsumi, Akira (2000). Verbal irony as implicit display of ironic environment: Distinguishing ironic utterances from nonirony. *Journal of Pragmatics*, 32, 1777-1806.
- Wetzel, Patricia, J. (2004). *Keigo in Modern Japan: Polite Language from Meiji to the Present*. Honolulu: University of Hawaii Press.

武装する敬語

—非命題的アイロニー考察—

尾 鼻 靖 子

従来アイロニーは話者の発話の文字通りの意味と話者の意図との間に真偽（命題）の差が見出されることによって成り立つ、と定義されてきた。しかし、日本語のアイロニーの中には、敬語を使用することでそのような命題が前提になくともアイロニーを生起することがある。本稿では、それを「非命題的アイロニー」(non-propositional irony)と名付け、そのようなアイロニー現象で敬語がどのような機能を果たすのか、どのような効果を生み出すのかを議論する。

敬語自体が適切に使われていても、例えば目上へのアプローチの仕方が敬語の持つ規範的意義と不整合を起こす場合（例：余情的な発話を付加する、目上へのストラテジーとしては不適切な言葉を選ぶ）、敬語が隠れ蓑となって目上への間接的応酬となり、それがアイロニーとして提示されることがある。あるいは、相手の敬語発話を繰り返すことで、元の尊敬語が自敬語となり、あるいは謙譲語が相手を格下げする言葉に転じることになり、その否定的発話がアイロニーとして提示される場合もある（これを本稿では敬語のUターン現象と名付ける）。いずれの場合にも、話者の意図と発話の内容的意味との間には何らの不整合性は見られず、アイロニーは敬語とその周辺に見出される逸脱性によって生じている。従来、敬語の皮肉として典型的な例は、目上が目下に不必要な敬語を使用する場合であるが、この例にも話者の意図と発話の内容には不整合性が見受けられず、敬語使用の規範的意義から逸脱しているという点で、非命題的アイロニーとして分類される。本稿では、さらに上記の二種類の敬語アイロニーの例を分析する。

以上のように、命題を前提としたアイロニーの定義は、敬語アイロニーの中には当てはまらないことがある。本稿ではアイロニー定義の再考も試みる。